『社会科学ジャーナル』43〔1999〕
The Journal of Socical Science 43〔1999〕

民族の固有な文化を世界へ向かって説明する人々

―アジア諸国の文化遺産理解の背景にある問題とは何か―

石澤　良昭
(上 智 大 学)

1．民族固有の伝統と文化

多元的民族社会の中で、当然のことながら、民族固有の伝統と文化はその構成単位をなすものであり、尊重されるものです。民族の固有文化は、村落や集落により保存され、維持され、発展していくものです。これはそこに住む人々のアイデンティティの中核をなすものです。グローバライゼーションという全地球的な考え方が模索される中で、それぞれが依って立つ諸民族の固有文化の在り方を論じていこうと思います。特に固有文化の最も典型的なものは文化遺産であり、そこには有形文化財と無形文化財があります。今回は有形文化財の問題を取り上げ、民族的視座とアイデンティティの問題を併せて考察したいと思います。事例研究としては、カンボジアの民族文化の復興を例示していきます。

文化財の保存修復の重要性および緊急性についてはすでに多く議論がなされてきました。21世紀には科学技術が飛躍的に発展し、情報化が著しく進み、世界全体の均一化と機械化がさらに進みつつあります。文化財の研究と保存修復の事業は、こうした世界の均一化現象とは反対に、個性豊かな民族の伝統と、その国（地域）の固有の文化および歴史足跡を私たちに実証してくれると同時に、未解決の歴史・文化・社会などの問題を究明する重要な手掛かりを与えてくれます。こうした保存修復活動推進の背景には、一つに文化財の存在する国もしくはその民族の立場に立った考え方があり、他の一つは世界的人類的な立

場に立った考え方があります。私たちは何よりも第一の立場を重視し、そのために私たちとしてどのような手伝いができるか、それがその国の文化財の修復活動の将来にどのようにつながるのか見極める必要があります。これらの遺跡研究を遺跡と民族という視点から考えるならば、そこに住む人達に民族のルーツを考え、その地域の歴史の興亡を確認する手掛かりを発掘し、民族と文化のアイデンティティの基礎となる資料を提供するものといえるでしょう。こうした学術的裏付けにより、住民たちは民族的誇りと自信を持つことになり、各国では歴史の研究、遺跡の保存とその公開を重要な文化政策に位置付けているのです。その点で、遺跡研究の現代史的な意義は大きいといわねばなりません。

2．アイデンティティの再構築について

私たちは1984年から、遺跡を守る仕事はまず「人」の国際協力から始める必要があるという方針を掲げ、「東南アジア文化遺産の保存修復に関する比較基礎研究」プロジェクトを発足させました。それは日本・タイ・インドネシア・ビルマの 4 ヶ国の遺跡および文化政策の専門家32名で組織されました。このプロジェクトの特色は遺跡の保存修復をやって現場の係員も参加してもらいました。そして、東南アジアの文化遺産のボロブドゥール・パガン・スコータイ・アンコールの 4 遺跡を採り上げ、ユネスコは東南アジア版の地域文化協力プログラムと位置付け、高い評価を受けました。その間にボロブドゥール・パガン・スコータイ・東北タイなど 7 回におよぶ現地国際シンポジウムを開催し、遺跡の現地検証研究を行い、日頃地元で保守作業に従事している現場職員たちにも出席を求めました。討議に参加してもらい、事例研究を発表してもらいました。「アジア現場に学ぶ」姿勢は、私たちの基本的な考え方でありました。これら 4 遺跡を守るための、文化復興に向けての専門家同士の国際協力は、シンポジウムの成果として、英文の1400ページに及ぶ重厚な報告書 *Cultural Heritage in Asia*, vols. 1 - 7, (Institute of Asian Cultures, Sophia University, 1985-1992) にまとめられています。

結論として、文化遺産は民族の誇りと伝統の象徴であると私は考えます。その修復はそこに住む人達の手でなされることが原則です。そこに住む人たちが文化主権を持っているのです。民族の固有な文化を世界へ向かって説明できる人々は誰よりも現地に暮らす人々だからです。遺跡などの保存修復に関する国際協力は、何といっても人材養成などそこに暮らす人々の自立を助ける協力がその基本でなければならないと私は考えます。

3．事例研究－1980年からのアンコール遺跡調査・研究・保存・修復

カンボジアでは、1975年から約４年間にわたり、約150万人にも及ぶ人々が不慮の死を遂げ、伝統的村落・仏教社会組織などが徹底的に破壊されています。20世紀の中で、これほど民族文化を否定した文化破壊はなかったのではないでしょうか。いうなれば、民族改造の政策とでも言えるでしょうか。今回は、そうしたカンボジアの打ちひしがれた民族文化の再生と、その復興に向けての手伝いの事例を取り上げていきたいと思います。

私たち上智大学を中心とするアンコール遺跡国際調査団は、1980年から内戦中にもかかわらず兵隊に守られて遺跡保護の応急工事などを手伝ってきました。応急工事といっても石材の落下を防ぐ支柱を立てるとか、遺跡にたまった水を抜くとか、熱帯の植物の下生えを除去するとか、人の手による保護活動が中心でした。かつては地元の作業員がほうきで雨水を外へ出していました。1975年からのポル・ポト政府下でカンボジア人専門家が不慮の死を遂げていたのです。

アンコール遺跡群は1970年からの内戦と国内混乱のためにこれまで20年あまりにわたり放置され、戦闘による破壊や盗掘、それに熱帯の厳しい自然のもとで野ざらしとなり、現在も崩壊の危機に直面しているのは事実です。カンボジアのパリ和平協定が1991年に結ばれ、国連の PKO 活動を経て1993年からカンボジアには平和が戻りました。1997年７月には武力衝突があり、私たちを心配させましたが、調査、研究は再開されました。

私たちがこれまでの20年間の経験から得た結論は、「カンボジア人による、カ

ンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」が必要であるということでした。

アンコール遺跡の調査・研究および保存・修復活動プロジェクトは1998年 8 月までに 5 回の予備調査団および24回の調査団を派遣しました。調査団には、日本とカンボジアを中心にフランス・アメリカ・イギリス・スイス・オーストラリア・ベルギー・エストニアなど 9 ヶ国から79人（延べ人数）の専門家が参加してきました。それらの調査・研究の成果は、14冊の報告書『カンボジアの文化復興』(vols. 1 -15, 1984～1998) にまとめられ、日・英・仏・カンボジアの 4 ヶ国語で書かれています。また、一般啓蒙書として『アンコール遺跡を科学する』(1993～1999) 6 冊が刊行されています。

(1) バンテアイ・クデイ遺跡およびアンコール・ワット西参道の現場から

カンボジアの将来の保存専門官（conservator）となる研修生たちの実習と訓練の様子を述べていきたいと思います。

調査・研究・保存修復を実施している遺跡はバンテアイ・クデイ寺院（12世紀末）およびアンコール・ワット西参道ですが、両遺跡とも主としてカンボジア人研修生の実地訓練の場所でもあります。

現地ではアンコール地域遺跡整備機構（アプラサ）およびアンコール遺跡管理事務所と協力して調査活動を実施し、保存修復作業が綿密な調査データに基づき一歩ずつ始まっています。調査団はフランス極東学院が開発した技術工法を踏まえながら、土着技術に注目してカンボジア人作業員のトレーニングも実施しています。

また、磁気による石材の強弱診断法を新しく開発し（共振法：東北工大盛合禧夫教授)、熱帯アジアにある遺跡に対する新技法や石材の耐久検査法などを構築・開発中でもあります。

(2) カンボジア人研修生の養成プロジェクト—文化復興の人材養成

カンボジア人若手技術者および学生の人材養成活動は1990年 3 月から始まりました。第 1 回はプノンペン芸術大学（現在の王立芸大）の考古学部と建築学部において10日間にわたる集中講義、第 2 回からはプノンペンの集中講義とシェムリアップの現場実習の 2 本立てとなっていました。また、1991年 3 月からはバンテアイ・クデイ遺跡において学生の現場研修を開始しています。1997年12月まで 7 年半の間に現場実習が17回、176名（延べ人数）の学生が480日間の専門研修を受け、35名の専門家・教授がこの指導に当たってきました。1994年からは保存修復工事に備えてカンボジア人石工の訓練が始まり、成果をあげています。97年 2 月からは調査団の専門家がユネスコと協力して、同芸大で「Cultural Site Management」および「カンボジア史」をカンボジア語で講義しました。

私たちは、考古学科の学生 5 名と建築学科の学生 5 名を選び、講義および現場実習を通じて高度な専門知識とより実践的な実習ができるように専門カリキュラムを作り、年次進行で講義と実習を実施してきました。そのために保存科学の専門分野のカンボジア語のテキストも作成し、測量の実習も必修にしました。ほぼ毎年 3 月、 8 月、12月にバンテアイ・クデイ遺跡において現場実習を継続的に実施しています。そしてカンボジア人研修生などが合宿をして講義を受け、実験や図面作成ができます。上智大学アンコール研修所（ 2 階建て、約290m²）も1997年 8 月に完成しています。

この研修所には考古学と建築学の研究室があって、10名の研修生は毎日ここで現場実習のまとめや出土品の整理をやっています。

さらに高度な専門研究をするための日本での保存科学・地域文化研究関係の大学院教育プロジェクトが始まっています。宗教法人真如苑奨学金プログラム(1997-1999) によりアンコール遺跡現場で 7 年半研修に参加したこれら10名の研修生の中から 2 名が選抜され、1997年 6 月に上智大学大学院地域研究専攻で学位を取得するため来日しています。また、同年日本外務省のアジア・ユース・

フェローによる大学院生２名も来日し、１名が上智大学大学院へ入学し、現在熱心に修士課程で学んでいます。

(3) 遺跡・村落・森林との共存共生プロジェクト

私たちは遺跡の保存・修復だけを考えているのではなく、遺跡の周辺で生活している村人たちの農村社会の発展と民族文化を再興するプロジェクトを遺跡に結びつけ1991年８月から始めています。近隣森林の自然環境の調査（植物・生態など）およびバンテアイ・クデイ遺跡周辺の村落調査や水利・水質調査などが実施されています。さらにシェムリアップ州の無形文化財についての調査、特に小型影絵芝居、トロット（鹿頭行列）などのインベントリー作成調査が続けられています。特に北スラ・スラン村の経済・社会調査や伝統民族文化の調査成果が積み上げられています。これが村落と森林と遺跡の共存共生プロジェクトです。

４．発掘・保存修復を通じた文化復興協力

私たち上智大学調査団（アンコール遺跡国際調査団）には日本の９大学と５機関が参加し、次のような方針を掲げて活動しています。

第１：カンボジアの文化遺産はカンボジア人の手で責任を持って守ること。カンボジアの文化財はカンボジア人の専門家が保存修復し、これを後世に伝えていくべきであるという考え方から、それを守る専門家（研究者と技術者）の養成が８年目に入っています。カンボジアの自立を援ける人材養成です。

第２：文化財の調査・研究と保存修復事業の密なる連動。文化財の保存修復は損壊箇所を直して後世に伝えればいいというだけでは不十分です。それらの文化財がどの時代の、どんな材料で作られ、その目的、その宇宙観、様式などの科学的解明に基づかない修復は、本来のものを破壊することになります。つまり、綿密な学術的調査・研究に連動する保存修復でなけれ

ばならないのです。

第３：遺跡保存の修復研究における中・長期的展望の必要性。綿密な遺跡調査を行うとともに、これに基づいた中期および長期的なマスタープランに基づき保存修復について考えなければなりません。長期とは30年とか50年という単位で保存修復を継続し、伝統工法・技法を再評価し、カンボジアにおいて使えるように改良しながら先端技術と土着工法を組み合わせていくということです。遺跡を取り巻く自然環境についても、水利潅漑や植物・生態環境も長期的な展望に基づき考える必要があります。文化協力は地味な長期にわたる仕事なのです。

５．カンボジアの民族文化を学び、日本人の考え方を知る

日本において東南アジア地域の言語を学び、考古学や建築学を修めた専門家はその数が限られています。日本人のほとんどは日本の技術は最高で、援助するお金もあり、有能な研究者・専門家がいると考えており、だから日本がやってあげるという意識があります。このように日本上位の考え方に立つと、そこには相互の信頼関係は生まれてきません。熱帯アジアと日本では風土が異なり、想像できないような障害のために日本方式の技術や方法論が有効とは限らないのです。

これまで述べてきたように、遺跡などをその地域社会から切り離し、カンボジア文化の文脈で読むことをせず、ただ修復すればいいんだという技術的観点から修復のみに終始する技術至上主義はやめなければなりせん。遺跡を守る協力はただショベルカーで掘ってクレーンで石材を積み直せばよいというものではないのです。まず、何よりも遺跡に対する綿密な基礎調査や研究、石積み手法などの研究と経験が必要です。現地の技術レベルに適合した技術導入から始まり、現場を見ながら徐々に新機器や先端技術を持ち込まなければなりません。文化協力の原点を踏まえておかないと、文化遺産の保存協力には決してならないし、遺跡破壊といわれてしまう恐れがあります。

こうした文化遺産の研究や保存協力には、発掘手法に習熟した考古学者、修復経験を積んだ建築家、石材を動かせる有能な石工など、まず何よりも「人」の養成から始めなければなりません。私たちは現地側の王立芸術大学の先生方と共同で人材養成や発掘および修復事業を行ってきましたが、いろいろなところで文化摩擦が起こっています。日本では当たり前のことがアジア諸国ではそうでないという事例が沢山あります。しかし、現地の人達から学ぶことが沢山あります。この地方の影絵芝居を見るとか民話を聞くこともあります。いつ田植えをするとか、どうすれば水が抜けるとか、この木の実には薬効があるとか、毎日住民に教えられることも事実です。

結局のところ、文化協力とは「ぶつかり合い学ぶ」ことであることを実感させられます。こちらが善意と思っても、現地側は干渉と受け取る場合があります。日本のやり方だけが普遍的とは思いませんが、こうした文化摩擦はいい意味での相互理解の始まりだと思います。文化復興に向けての協力はつまるところ「人」の交流であり、そこにおいていかに相互の信頼関係を構築していくかにかかっています。20年間の経験からいえば、2割が実際の活動事業（調査・研究・修復・教育など）で、8割がそれ以外の現地側とのやり取りや諸準備でした。

結論として、例えばアンコール遺跡群はカンボジア民族の誇りと伝統の象徴です。その保存修復はあくまでも現地の人々の手でなされることが原則です。遺跡などの保存修復事業に関する文化学術協力とは、何といってもそこに暮らすアジアの人々、例えばカンボジアの人々の自立を助ける人材養成などがその基本でなければならないと考えます。民族の固有文化の再生と復興に向けて、文化遺産保存活動を通じてその中核であり担い手となる保存官（conservator）の養成こそ、緊急の課題なのです。